

相引川

相引川は、屋島と四国を隔てる 5 メートルほどの水路である。屋島（"屋根の島"）はその名の通り、かつては瀬戸内海に浮かぶ独立した島だった。船の接近を見通すことができ、防御しやすい地形であることから、戦略的な場所として珍重されていた。また、屋島は相引川によって、東側の五剣山や牟礼の町と隔てられている。1637 年に行われた埋め立て工事は、当時の高松藩主・生駒高俊（1611-1659）が新田を開くために命じたもので、結果的に屋島と四国を結んだ。しかし、後の統治者である松平頼重（1622-1695）は屋島を再び本土から切り離すことを望み、1647 年に相引川がこのために掘られたのだ。

相引川の東端と西端は、ともに瀬戸内海に接している。川になる前は、干潮時になると浅瀬の水が海に逆流し、両方向に流れて浅瀬になっていた。この現象から「相引」という名前がついたと考えられている。また、現在の河口付近の東に位置する壇ノ浦で行われた平氏と源氏の「屋島の戦い」（1185 年）に由来するという説もある。この説でいう「引き合い=相引」とは、どちらも譲らない苦しい戦いのことである。現在、川には自動開閉式のタイドゲートが設置されているので、流れが海に左右されることはない。しかし、地元では「相引川は数歩で海を渡ることができる」というジョークがある。